

日章旗と下河校長

桑高百周年の記念誌『桑高百年』の編集のため、資料提供を呼びかけたところ、いなべ市北勢町麻生田の小川正直さんから、叔父の川瀬作三郎さんの出征にあたり寄せ書きをした日章旗（写真参照）が桑高に寄贈された。



その日章旗は桑名中学校校長下河茂嗣をはじめ、同級生が署名したものである。川瀬君は桑名中学校の5年生の時に海軍飛行予科練習生に合格した。他にも陸軍少年飛行兵へ桑名中学生3人が合格したので、川瀬君とともに1943（昭和18）年9月25日に壮行会が開かれた。この年には桑名中学生が陸軍士官学校へ6人、海軍兵学校へ4人が合格した。

第二次世界戦争で日本軍は敗色が濃厚になるとともに、戦死する兵隊も多くなって、兵力を補給するため、生徒の入隊志願者名を提出するように軍隊は各中学長へ求めた。1943年4月から桑名中学校の校長になっていた下河校長は「適任者なし」との回答を続けていたが、軍隊からの圧力が強くて、ついに志願者を勧誘せざるを得なくなった。その結果が川瀬さんらの入隊になった。

下河先生は1899（明治32）年に福井藩の士族として生まれ、東京高等師範学校（現筑波大学）を卒業して、各地の中学校で英語の先生として勤務した。東京府立第二中学校（現・東京都立立川高校）勤務の時には、同僚の米英人教師を自宅に招いて交友していた。日本が米英と戦争するようになって、下河先生は非常に苦悩されていたと思われる。

1944年には中学生も女学生も学校へ行かずに工場へ勤労働員されたが、桑名中学校生は名古屋の工場へとの話もあったが、下河校長が「桑名にも軍需工場があるから桑名に勤めさせてほしい」と要求したので、桑名中学生は自宅から通える桑名の工場勤務となった。

1945年7月17日未明、桑名はアメリカ軍機の攻撃をうけて焦土となった。桑名中学校も全焼した。当時の校長の最大の任務は天皇・皇后陛下の御真影と勅語を守ることだった。猛火の中で下河校長は御真影と勅語を運び出すため、大火傷を負ってしまった。そして8月15日の終戦の玉音放送（天皇の肉声によるラジオ放送）を包帯姿で布団の上で聞いた。

日本は戦争で負けたが、日本再生のために、下河校長は火傷が癒えぬままに活動を開始し、いち早く校舎の再建に取り組み、1945年10月1日にはバラックながら新校舎の竣工を迎えている。

1948年桑名中学校は廃止となり、新制の桑名高等学校が誕生したので、下河校長は新制の四日市市立北部中学校校長となった。その後は新制の河原田高校・神戸高校・員弁高校の校長となり、員弁高校在職中の1952年に病気で逝去された。享年52歳の若さであった。

（この文の抜粋を『桑高同窓会会報』No.31に掲載しました）